

## 橋本先輩を偲んで

昭和19年卒 牧野 鐵 五 郎

昭和15年(1940年)私は同志社大学の予科に入学した。それまで、大阪の扇町商業に通っていた私は、陸上競技部で走り幅とびや三段跳びなどを得意にしていた。したがって同志社に入学してもその方面に進もうかと考えていたが、私の体の成長が止まってこのままでは、記録の向上も期待できないと考えていたところへ、タマタマ通り掛かった体育会の掲示板に

「航空部員募集」

の張り紙を発見！モトモト幼い頃からの飛行機少年の私の心に大空に対する燃えるような熱い思いが一舉に噴出した。

「もう航空部しかない！」

恐る恐る指定された学生会館、当時の学生会館は現在の神学館の西側に二階建の小さな建物で、大阪などから通学している学生の中には、朝が早いために朝食を抜きにして登校して、一時間目と二時間目の間に大急ぎでこの学生会館の食堂に走り込み、一杯13銭のキー井(キツネ井)を掻き込んでまた授業に出たものだ。そんな意味ではなじみの深い学生会館であったが、今回は一寸雰囲気違った。

大きなテーブルの向こう側には、今にして思えば竹内、橋本、牧野(伊)須川さんなどがドッカと座り、オドオド航空部に入部したいと集まってきた我々に

「お前等！航空部に入りたければ、この夏に長野県霧ヶ峰で開かれるプライマリーの合宿に参加して辛抱出来たら秋からの飛行機訓練に参加させてやる」

と仰せになった。

あとで分ったことだが、唯でさえ恐い上級生の

中でも、眼鏡を掛けた橋本サンのギョロリとした眼鏡越しの一瞥には誰もがチジミ上がった。

初めての霧ヶ峰に到着した私達を待ち受けるかのように目の前に現れた上級生の一団の中に橋本サンの姿を見たとき、ビックリ仰天すると共に大変に懐かしいような思いをしことが今も心の底に残っている。

橋本サンは大阪から、飛行機曳航で名古屋経由、霧ヶ峰にソアラーを空輸して来られたと言うことであつた。

スゴイモンダナ～！

自分もそんなことが出来るようになれるのだろうか。まだプライマリーに乗りもしない私の脳裏を走る一種の不安と、将来への大きな目標がフツフツと沸き上がるのをどうしても抑えることができなかった。

一週間の霧ヶ峰の合宿も無事に終わり、愈々大阪に帰るといふとき、私の手元に橋本サンからの伝言が伝えられた。手紙を開けて見ると、私が帰るときに、諏訪の町で何か土産物を買ってきてくれと言うことと、何がしのお金が同封されていた。橋本サンはソアラーを曳航してきた九五式三型の飛行機を大阪まで空輸するために霧ヶ峰から直接大阪へ帰るから、諏訪の町で土産を買えないので、頼むということであつた。

もう古いことで、どんなお土産を買って帰ったか覚えていないが、持ち帰った土産を橋本サンのご自宅に持って行って驚いたことは、ご実家というのが、私が扇町商業時代、毎日自転車に登校するために通っていた道の近くで、これも何かのご縁だと感じた。

以後何かにつけてご自宅にうかがうことが多くなり、飛行場でも「鐵チャン、鐵チャン」と大変に可愛いがって頂いた。

昭和16年の夏に京都府下の玉水で夏のプライマリーの合宿が開かれた時、私は同僚の門田、清水らと参加したら、橋本サンが学生助教として参加しておられた。私と門田は既に飛行機の単独飛行を終わっていたので、プライマリー位は屁ノカッパと馬鹿にしていた節があったが、サテやってみると、プライマリーの接地の要領が分らない。

毎回着陸の接地でバンドして助教の永田サンに叱られている私を見た橋本サンが、

「お前、飛行機で単独してるのにそのザマはなにごとや！」と笑われた。

それに奮起した訳でも無いと思うが、それ以降の着陸は至極順調になって、合宿の最終日には玉水の土手の上からダブルショックで飛ばせて貰い飛行機単独生の面目を保つことができ、先輩の一言は大したもんだと感心することしきりであった。

橋本サンは学生の頃から近眼だったようで、卒業後は操縦候補生の道には進まず、一般の道を進まれ、いつか見習士官の姿で我々が訓練している大阪空港に来られたことがあり、その時の写真が今も私の手元に残っている。

戦争の悪夢が通り過ぎ、再び大空に日の丸が羽ばたくようになり、同志社の航空部も昔の隆盛には及ばないものの、輝かしい伝統を受け継ぐべく立ち上がったが、その発展の陰にはいつも橋本サンの姿があった。

OB 会も現役学生の活動に積極的に貢献したが、

橋本サンは何時もその先頭に立って翔友会の発展に寄与された。

翔友会は何時も橋本サンのご好意に甘え、会議の会場をお世話して頂いていた。

私が歳の割には早く足の膝の具合が悪くなっていった頃、

「鐵チャン、今年もスキーに行つて来たで〜」これにはギャフンであった

そんなことがあつて橋本サンは不死身の先輩と思つていたが、平成20年の夏、ついに巨星は倒れた。

お嬢さん方に見守られ、幸せなご一生であつたと思うが、フト空を仰ぎ見たとき、そこにまだ特徴のある飛行眼鏡を掛けた橋本サンの笑顔が浮かんでくる。

「ドウヤ！鐵チャン、頑張つとるか？」

橋本サンどうぞ安らかに眠りください。

合掌。

偉大な先達の足跡 — 輝かしい戦歴 —



①



②



③



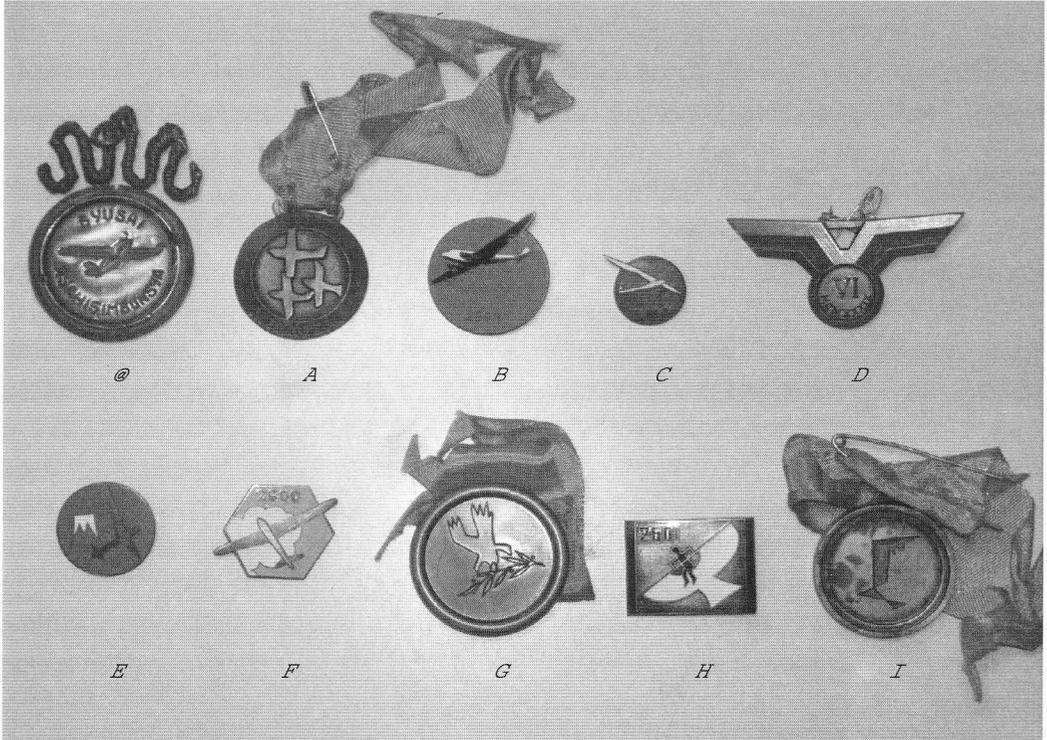
④



⑤

- ① 年度不明 全日本学生航空選手権大会陸軍大臣賞(優勝?)
- ② 1939年 第6回全日本学生航空選手権大会 種目別優勝
- ③ 1940年 第3回全日本学生グライダー選手権大会 3位
- ④ 1938年 第1回全日本学生グライダー選手権大会 4位
- ⑤ 1940年 第11回明治神宮体育大会滑空訓練大会 順位不明

歴戦の証(参加章)



- ① 1936年 第3回全日本学生航空選手権大会
- ② 1937年 第4回全日本学生航空選手権大会
- ③ 1938年 第5回全日本学生航空選手権大会
- ④ 1938年 第1回全日本学生グライダー選手権大会
- ⑤ 1939年 第6回全日本学生航空選手権大会
- ⑥ 1939年 第2回全日本学生グライダー選手権大会
- ⑦ 1940年 第3回全日本学生グライダー選手権大会
- ⑧ 1940年 第7回全日本学生航空選手権大会
- ⑨ 1941年 第4回全日本学生グライダー選手権大会
- ⑩ 1941年 第8回全日本学生航空選手権大会

橋本先輩のアルバムから

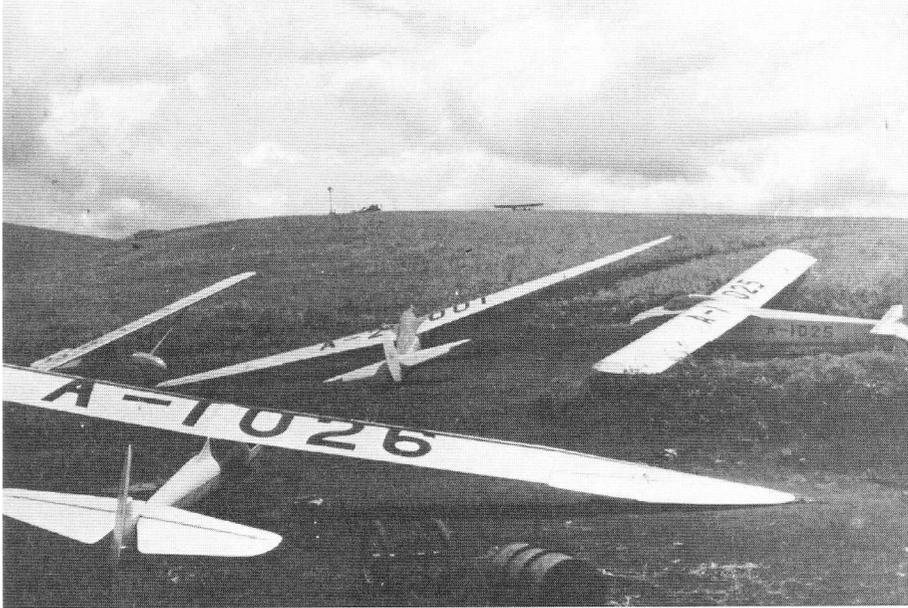


前列左から3人目橋本さん(霧ヶ峰)



牧野 鐵五郎さんでもビビッタと云う助教時代の橋本さん





■第3回全日本学生グライダー選手権大会の様子  
(霧ヶ峰)  
橋本さんはこの大会で3位に入賞された。



■後席に乗り込む橋本さん



## 父の青春飛行

佐竹 恵子

同志社を愛し、同志社大学の航空部OBであることを誇りに思い、グライダーが、そして青空が大好きだった父が、89年の生涯を閉じました。

通夜・告別式にはお忙しい中、翔友会の方々のご参列を賜り、窪田様にはご弔辞を読んで頂き、皆様にはカレッジソングで送って頂きました。本当に幸福な父でした。感謝とお礼の気持ちで一杯です。

大正7年生まれのお父は、二・二六事件の日が同志社の受験の日だったこと、初めて霧ヶ峰に行った時は、夜行列車で諏訪に着き、そこから歩いて登ったこと、そして電気は無くランプだったこと、祖父に、「操縦は慣れた頃が危ないから気をつけろ」と言われて家を出た日に、雲の中で方向が分からなくなり、もうダメかと思ったその時、雲の切れ目から松山城が見えて九死に一生を得たこと、また、高校野球の始球式のボールを上空からピッチャーマウンドに投下したことなど、まるで昨日のこのように覚えていてよく話していました。

それにしても強い近視で、小さい頃はよく病気をしたという父が、どういうわけでグライダーや飛行機に乗るようになったのでしょうか。

昭和17年3月の卒業が前年の12月に繰り上げ卒業となり、戦地に赴きそこで終戦を迎えた父は、私には想像出来ないような苦労や経験をしたと思います。大学生活、大空を飛ぶことは父の青春そのものだったと思います。

母が2年間の闘病生活の後平成18年に亡くなり、その寂しさは娘の私たちでは補うことは出来なかったようです。

父も母も元気な時は、二人でよく出かけ、旅行もしました。ジャンボジェット機のような巨大な物体で空を飛ぶのはあまり好きではなかったようですが、それでも海外に出かけ、イギリスの航空ショーやAir Force Museumにも行きました。北海道に行った折は、帰りのステューデスの方に、昔自分が飛行機に乗っていた時の話をしご機嫌だったと母が言っていました、話をすることで、どうも気を紛らわしていたようです。

航空部の活躍を大変楽しみにしており、かねがね「一度妻沼に行ってみよう」と言っていましたので、昨年妻沼での大会の前に何度も誘ったのですが、その頃から足が弱くなって転ぶこともあり、外出の機会も少なくなり、グライダーを見に行くことは叶いませんでした。

毎月楽しみにしていた学友お二人との会食に梅田まで出かけた二日後に父は亡くなりました。徐々に弱っていたとはいえ、あまりの急なことで皆驚きました。

「長い間お疲れ様でした。どうぞ広い空を自由に好きなだけ飛んで下さい」という母の声が父には聞こえた、そんな気がしています。

同志社航空部は今年度立派な成績で全国大会に出場されるとのこと、父も遠くの空から応援していることと思います。益々のご活躍を願っております。

翔友会の皆様には本当に長い間お世話になりました。心より御礼申し上げます。

千葉在住 橋本 元雄次女 佐竹 恵子